

**独立行政法人国立国語研究所「外来語」委員会 第2回
議事要旨**

1. 日時 平成14年9月20日(金)10:00～12:00
2. 場所 国立国語研究所会議室
3. 出席者 甲斐委員長, 中西副委員長, 水谷副委員長, 相澤委員, 阿辻委員, 加藤委員, 倉島委員, 古賀委員, 輿水委員, 小森委員, 柴田委員, 関根委員, 田中委員, 鳥飼委員, 中山委員, 長谷川委員, 福田委員

4. 会議の概要

(1) 言換え語選定の考え方

一般への定着が十分でなく分かりにくい外来語の第1回言換えを本年12月に予定しており, その言換え候補語を次のように選定することとした。

外来語の枠組みとして定着度により「十分に定着している語」「定着途上にある語」「定着が十分でない語」の3つに分類する。この定着度による分類について, 今回は時間的制約があることから意識調査アンケートによる手法は採らず専門家5名による評定で分類する。

国の最新の行政白書に出現する語で委員からも言換え希望のあった語のうちから, 「定着途上にある語」と「定着が十分でない」に分類した約70語を第1優先の候補語とする。

上記の語を除いて国の最新の行政白書に出現する語で, 「定着途上にある語」「定着が十分でない」語に分類した語のうち50語ほどを作業部会で第2優先の候補語として選定する。

(2) 第1回12月発表までの進め方

上記(1)で選定する候補語に加えてその用例や辞典等での説明例などの参考資料を委員に送付して検討願い, 11月及び12月に委員会を開催して言換え語案を審議決定し, 12月末には第1回の言換えを発表することとした。

(3) 会議での主な意見

コンピューター関係でカタカナ語が多すぎる。しかもそれが複合して他の言葉と使われると, あらゆる場合に共通して言い換えうる言葉はすでに無くなってしまっている。言換え語はいろいろな複合をしたときにも通じるものがない。

1つの語がいろいろなに分かれてしまうのはまずいが, しかしそうなるとなかなか言い換えはできない。漢語に訳したほうが落ち着くし, 印刷したときにも安定するが, 漢語にした場合, 耳で聞いてわからないということがある。耳で聞いてわかる漢語にして, しかも連想が働くという条件を考えると大変な難問であり, 結局外来語のほうが楽ではないかというふうにも思ってしまう。

市の広報を見たところ, 外来語・カタカナ語が頻繁に出て, しかも国民生活にかかわる金融とか介護とか大事なところがカタカナ語のオンパレードであり, 危機感を持つ。

外来語・カタカナ語のひとつの大きな問題は, 英語のオリジナルとまったく違った発音と, まったく違った意味で使ってしまうところにあり, 日本語を学ば

うとする人にとっては大変な障害になる。また意味がまったくずれてきているが使っている日本人は、英語であると信じているのでそのまま使うとコミュニケーションに齟齬を来す。せめてオリジナルの英語と違う間違っただけの使い方や英語とはどうも思えない英語まがいのカタカナ語は、整理をしたい。

定着度の判定についてはよく考えておかないといけない。専門家の判定は現在が一番いい方法だと思うが、主観的な部分が入っており生きていく人間のものです。10年も持たない。将来は別の方法を考えるほうがよいのではないかと。判定には国語辞典も使っているがこれは「十分定着」と「定着途上」の境を見るのはいいが、「定着途上」と「定着不十分」の間は見られない。世論調査は万単位の語になると予算面、時間面で無理であり何らかの別の数値を導入することも考える必要がある。特に「定着途上」と「定着不十分」の間をどう明確化するかが課題であろう。

言換え語を考えたときに、書き言葉で考える場合と話し言葉で考える場合と違う条件がある。考えるに当たって、文字がついてまわること意識するか、あるいは話しを聞いても混乱しないことを意識するか課題となる。

例えば「アイデンティティー」は、日本のような比較的単一に近い民族の国にとって、今までなかった概念である。放置していると、「アイデンティティー」という言葉がこのままで生き残っていくことになる。「アイデンティティー」と出てくるとルビのように「個我」という意味を打って、それを広げていく方法なども検討しないといけない。

日常的にも広く使われいろいろな用例があって、1対多数の訳にならざるを得ないようなものは気をつけたほうがいい。動詞にして「する」が付く、あるいは「～な」が付くようなものは問題で、実際の用例がなく切り取ったものだけで考えるのは危ない。

十分定着していないが国民生活に緊要な言葉として入り込んでいるものがあり、これを言い換えで示すことは大変な混乱を招きかねない点もある。一方、医療や金融面の国民生活にかかわるテクニカルタームほどカタカナ語が多いので、そういうものについてある規範を示すことは、望ましいようにも思う。

世の中という言い方で定着しているかないかを客観的にとらえるのは難しい。公的な文書の中に専門語のようなものが、制限なしに流れ出していることが問題で、そこに言い換えとか注釈を付けてやれば理解ができる、そういう基本的な立場にいつも立ち返ることが必要である。

どのような言い換えをするかということは非常に幅がある。比喩的な内容にしてしまうのか、言葉だけでいくのか、日本語として受けとるのだから変容を覚悟したうえでやるか、いろんなやり方があり単純には考えられない。

多義語に関してはさまざまなものを提供する必要がある。微妙なニュアンスで複数のものを提示し、その人が使いたいニュアンスで使ってもらうようなやり方。一方定着ということを考え多少乱暴でもこれにしようという形で提案するほうが、定着が図れるということもある。そこが迷う。

言換えについては戦時中のいわゆる敵性語の追放ということがどこかの世代か

らはピンとくるだろうし、海外の新聞社などが右翼化というのは、そのことを言っているのだろう。この語はなぜだめなのか、あるいはなぜこれは使うと危ないのかという提示にとどめてどう言い換えるかという、その手取り足取り部分は、むしろ一般に任せてもいいのではないか。これからの日本語としての言葉の豊かさとか文脈を作っていくにはどうすれば良いかという観点に立った方が、日本語の文章を作っていくということに資するのではないか。

「ガバナンス」という言葉を言い換えようと努力した例がある。「統治・支配・管理」などと訳されてきたが、どれもニュアンスがちがう。そこで中国で古くから使われている言葉として「治理(ちり)」というのを持ってきて、「ガバナンス」に「治理」とルビをふるなどして普及に努めたが、結局、無駄な努力に終わってしまっている。

政策的な観点に立つと、定着しているものでもやめさせるという可能性もありうる。問題は物差しの立て方であり、立て方次第によっては混乱を招き失敗ということがありうる。意味を確認するためのものであれば、言い換え語というよりは、説明表現という形にしたほうがいいかもしれない。カタカナ言葉の言い換えは、そんな単純なものではないということだけは知らせる責任がある。外来語の中には相手をだまくらかすためにわざと概念をあいまいにさせて使う「詐欺語」、古い概念がどうにもならないので新しい言葉にする「ペンキ語」というものがある。こういうものも明らかにしていかなければならない。例えば「アイデンティティー」は、日本語の概念の中になかったものなので、こういうものはむしろ定着させていくべきではないか。定着させるための補助、尻押しをするために、しばらくの間説明を付ける、理解度が上がるまではそういう補助輪をつけるということも、考え方としてはある。新しい語がどんどん出てくるときに、どういう考え方をしなければいけないのか、あるいはこの語に対してどういう接し方をしなければいけないのかということは、データを揃えていけばおのずとその基準が出てくるのではないか。

言い換えという枠組みが有効なものというのは非常に少ないように思う。いい加減な使い方をしているものについてこういう使い方をするべきでないというような示し方、あるいは言い換えというよりは説明の仕方をうまくするといった枠組みを包含した形で考えていかななくてはいけないのではないか。

言い換えとなると漢語がたくさん出てくる。厳密な概念を持っているからそれはいいが、反対にやまと言葉になればあいまいだけでも、定着するといったようなこともある。

意味があいまいなまま、それぞれの使う人たちが自分の勝手に思っているイメージで使って、あたかも1つの同意が得られているかのような雰囲気が出てきているというような言葉を残してはいけない。なぜそれがいけないのかという影響の範囲、影響のあり方を考えることで緊急度が決まると思う。

用例がないと、なぜその言い換えになるかというのがわからないというケースが往々にしてある。なるべく実際の文章で外来語が使われている用例を挙げ、和語や漢語で置き換えることが可能であるという提示の仕方であれば、それは

ある程度説得的な方法になるのではないか。

言換え語数 100 程度ということにして、それなりの量のボリュームで見せるやり方。一方、半分の 50 語ぐらいににして一語一語について、なぜそうなのか丁寧な注釈を付け一語についてのボリュームを付けるという、2つのやり方がある。量的にいくか質的にいくか。量は半分に減っても、一つひとつ丁寧なものを作ったほうが、世間の理解が得られると思う。

以上